

しあわせのオハギプロローグ

(部内の有志で回したリレー小説。秩序と混沌を
行きつ戻りつする作風のぶつかり合い)

Moto・Yusaku・浅雪 やつさめ・おいがつお

・おだし・おもみつぎ・イチ・鳥沼・中沢央
・なしあじ・櫛櫛攀 攀・みどりい

二〇XX年、人類は再び危機に陥っていた。

前世紀に数多の犠牲の上へ打ち立てた諸国家は崩れ去り、今はただ荒野の中を放浪する者が数人いるだけのよう
に思われた。しかし、そんな不毛の地にも、既に英雄
は誕生していたのである。

「こりや落ちぶれちまったもんだねえ」

そんな英雄——フランク・オアギは、今日も灰色に廃
れた国々を訪れていた。

今オアギが歩いているのは、かつて神の国と呼ばれた
ニホンの、キョートである。五重塔が遠く、幽かにわな
ないでいた。石畳はひび割れ、満たされない渇きに呻き
をあげる。

ほこりにまみれた「茶」の暖簾が、人知れずたなびい
た。

オハギ。話でしか聞いたことはないが、それは黒く、
神々しく輝くアンコをふんだんに使った食べ物であるら
しい。彼が佻しさと物悲しさに包まれたこの土地へとや
ってきたのは、まさにそのオハギを探すためである。

「合流場所は……ここのはずだが」彼はひとしきり瓦礫
の山を歩いた後、朽ちた神社の境内である人を待ってい
た。

ある人とはキョート統治機構の元トップである。
突如、強い風が吹き竹がざわめいた。

「来たか、フランク・オアギ」

背後から声をかけられ、オアギは振り向いた。

「——お久しぶりですね、マスターハギ」

足音もなくオアギのすぐ後ろに立っていたのは、小豆
色をした髭を長く伸ばした仙人のような老人だった。オ
アギの声を聞いて、ハギは静かに目を細める。

「懐かしいな、たしか最後に会ったのは……」

老人は一瞬、オアギ越しに遠くを見つめ、そして直ぐ
にかぶりを振った。

「いや、昔のことはいいだろう。とにかく場所を移そ
う。これからの世界の存続に関わる大事な話がある」
神妙な面持ちで、ハギは口を開く。

「この世界は、いわばハンゴロシ状態であるためにほんのわずかながらだが人類は生き長らえている。それは解っているな？」英雄は静かに頷く。

「だが、このところこのハンゴロシ状態を打ち砕こうとする集団が各地で発生しているようなのだ。こう言うと正義の集団のように聞こえるかもしれないが、その実態は――

その実態は、たどえばきみがすずのいていぐくろそうになつたときわ 亀末君 餓鬼頭終亭 懸想担常盤 という旅芸人による独裁状態なのだ。奴はかつて人々を癒やした流行歌の一節を名に刻んでおきながら目に映るもの全てを破壊するという邪悪の徒そのもの。既に『調停者』達も大半が挫けそうになったと聞く。

彼らと『調停者』は過去何度も大規模な衝突を繰り返しており、そのつど、ここ、キョートのような廃墟が出来るようになってきた」

「で、本題は何なんですか？」

オアギは老人の長話にうんざりしていた。

「急かされるのはあまり好かんが……実を言うと、この街の復興を頼みたい。できるか？」

「それは……出来ません。他をあたってください。私の目的は、オハギを探す。ただそれだけです」

そもそも、マスターハギとこうして会うことになったのは、オハギについての情報を持っていると、彼が連絡をよこしてきたからである。

「おっと、すまぬ。先にこれを言うべきだったな」
マスターハギはあごを撫でる。

「どうやら、その旅芸人一派の次の破壊対象が、ここキョートの地下深くに眠る農業プラントらしいのじゃ」

ふむ、確かに農業プラントならばオハギの原料が見つかるかもしれない……ならさっさと用意できるはずであり、こんなところで無駄話をする必要はない。

「いやはや、何分大戦前のものだからろくに情報が残ってなくての、施設が生きてるのか危険物があるのかもわからぬし、ぶっちゃけ場所も特定できてない上にそれに割ける人員はいない……そんなところにお前さんだ」
マスターハギは、オアギの目を見据えた。

「フランク、農業プラントを探してはくれぬか。農業プラントを見つければ、旅芸人一派の目論見を阻止できるし、オハギの原料が見つかるかも知れぬ」

こちらの要求を満たしつつ自分の要求もしっかりと満たそうとする姿勢に、オアギは少なからず感心した。昔からこの老人はこういつたきらいがある。マスターハギの言葉の根本には一貫してキョートという街への強い思いがあることもまた、決して多くはない交流の中でオアギは察していた。

マスターハギを神社の境内に残し、彼は農業プラントへ向けて南に歩き出した。行きがけに協力を見込める知り合いに出会えるかもしれない。調停者の一人であるにもかかわらずイケズなあいつとはあまり顔を合わせたくは無いが、おハギのためならば仕方あるまい。

「あれえおアギ、また救済しにきたの〜？」

「うるせえぞ女ア……」

おアギの思ったよりも遥かに早く、調停者の1人——クリサンセマムに出会う。白銀の甲冑に身を包み、ブロンドの髪をなびかせる彼女の姿は傍目には高潔そうに映るだろう。

「救済なんかどうでもいい。ただ、農業プラントとやらを探している」

所変わって農業プラント上階、奴隷たちは良く分からない大きな棒をぐるぐる回していた。その下に農業プラントがあることも知らなければ、棒の意味も知らない人々だ。「農業」プラントには「農作物」がずらりと並んでいた。それぞれ何やら謎の赤い液体を滴らせており、異臭が凄まじい。マスターハギに騙されたのか？ おアギは、自分をこんなひどい場所に送り込んだ老人に殺意を感じた。

「ひどいね」

クリサンセマムが吐き捨てるように呟いた。杜撰な管理体制。ろくな食事も与えられずに力尽き、液体に身を溶かしつつある奴隷を踏み越え、緑ネオンの「順路」の看板を、二人は辿った。

「……なあ、クリサ。あれは本当に食べ物なのか？」

嫌な臭いを放つ、ズラリと並んだ何かのせい、鼻の奥が痛い。

「いや〜……食べる気はしないね、さすがに私でも。だけどこの臭いは……」

「前の戦いで食べた完全栄養食だな」

前の戦い……キョートで起こった、大福とずんだ餅をめぐる戦のことだ。二つの和菓子どちらが美味しいかをめぐり、多くの犠牲が生まれた。そして、その時おアギたちは完全栄養食として、納豆というものを食べたのだ。

「……味はなかなかイケるクチだったけど、あまり良い思い出じゃないね。戦いのことも思い出しちゃうし」クリサンセマムは苦い顔をする。

しかし、なぜキョートの地下深くで、キョートとは縁遠そうな納豆などというものが作られているのだろう。疑問は尽きないが、おアギとクリサンセマムは床に

まで広がった赤い液体を踏み越えながら先へ先へと進んで行った。

そして農業プラントの更に下層へと繋がる扉の前にたどり着く。ごくり、とどちらともなく緊張で喉が鳴った。室内からは謎の物音。二人は扉を開いた。

そこにいた衝撃的なモノに目を奪われ、二人は言葉を失った。

「これは……まずいね」

Next Phase : ミナゴロシ、中央のモニターにはそのように表示されている。そしてすぐ側ではまだ微かに粒の形を残す米が、無慈悲に打たれ始めている。

「次はミナゴロシ……そう書いてあるみたい」

クリサンセマムの眩きに、謎の装置を見つめていたオアギは驚きの表情を浮かべる。

「書いてある？ クリサ、お前文字が読めるのか？」

しかし、皆殺しか……。そういえばマスターハギが旅芸人がどうか言っていた気がするが、まさか彼奴らが人々を？」

突如としてその本性を滲ませたマスターハギ。戻るべきか、進むべきか、それとも既に手遅れなのか。長年の経験が鳴らす全力の警戒音は、次の一手を号んでいた。

刹那、全身を黒ローブに包んだ幽体のマスターハギが2人の目の前に現れた。彼は手に黒くて丸い物体をそれぞれを人々は「ザ・エデンズ・オハギ」と形容するくを持つている、というより念動力で浮かせているようだ。「思い出せフランク、汝が未だ「オハギ」であったころの記憶を！」

「オハギ……？何を言ってる——」
パンツ。突如としてマスターハギの幽体は爆ぜ、二人の足元にびちゃびちゃと音を立ててオハギがまき散らされた。

唯一、セイクレッド・アイテムたるエデンズ・オハギだけが確かな質感をもって、浮遊し続けている。

「……………」

しばらくの間、オアギの思考はマスターハギの言葉に、奇妙なほどに支配されていた。幽体が消えた後に広がったものが、自分が探し求めてやまなかつたもの、すなわちオハギであることに結びつくのに、大した時間がかかるほどに。

オアギは何かに取り憑かれたように、宙に浮かぶ聖なるオハギにふらふらと近付き、手を伸ばす。傍らの調停者が「やめろ」と言って制すのにも気付いていない様子で。

彼の手がおハギに触れた瞬間、辺り一面が眩むほどの光が、調停者の目を欺くようにおハギから溢れ出した。

……………おアギの脳裏に浮かんだのは、とうの昔に忘れ去られたはずの記憶だった。

なぜ自分がおハギを求めるに至ったのか、いつどこでマスターハギやクリサンセマムと出会ったのか、そして、フランク・おアギが、自分自身が英雄たる所以を。

………思えばずっと不可解だったのだ。何故、おアギの頭部はヒトの形とは異なる粒あんの塊のような不定形のものであったのか。

それは、この世界の創造主である「おハギ」が自らの姿に似せて作ったものであるということに起因し、それこそがおハギであり彼自身なのだ。おハギは天地創造の後に休眠状態に入り、神のいなくなった世界に残されたのは、フランク・おアギ——つまり、創始の残滓である英雄なのであったのだ。

「この世界に、決着をつけるとするか」

「え？ 何を言ってる……」

おアギはクリサンセマムの制止を振り切って、一言を残しその場を去っていく。

「まあた私を置いていきやがったよ、おアギめ」

クリサンセマムはなんとなしに傍らに落ちていたおハギに齧りつき、ふと顔を上げた。

「モニターの表示が変わっている？ こうしちやいられない、おアギ、待つてなさい！」

Next Phase : ?????おアギ、モニターに映った文字の一部はクリサンセマムにも読めなかったが、赤い文字が時間に猶予がないこと、そして何か危険なことが起こると暗示していた。

「間に合うといいんだけどねえ」 彼女はおアギを追いかけようと扉のほうへ向かった。

しかし次の瞬間、扉は紫銀に揺らめいたかと思うと爆炸を起こして変形、まるで鋼鉄のモヤツとボールのように全てを寄せ付けない堅牢なる鉄壁と化してしまった。

「結局最後はあいつ次第ってことか……」

クリマンセムはその断絶に歯噛みするが、実はそうでもない。正直この扉はめっちゃ頑張れば突破出来る。でもなんかめんどくさくなったのだ。それを悟られぬよう、クリマンセムはあんこ型エナジードリンク

『theANKo』を啜った。

遠雷が煌めく。

『theANKo』が心臓の鼓動を速め、血液が流れ始める。溶けた金属のように熱く。熱が指先まで満ちた、その瞬間——稲妻が迸った。そして、これからのおアギの

運命を表すかのごとき無慈悲な轟音が、遅れて響きわたったのである。

オアギの足取りはたしかなものであった。己に備わっていた英雄アンコの血が、彼を導いていたのだ。

オアギは全てを思い出した。
ただ、なぜマスターが今になってこんな場所で思い出させたのか引っ掛かった。しかし、ある記憶のなかの言葉が納得させてくる。

「アンコはアンコに惹かれあう」

誰の言葉かは思い出せないが、目的ができた。

「ボタモチ、お前は今どこで………何をしている？」
「思い出したか、フランク」

声が出した方を見ると、そこにはマスターハギが立っていた。しかし、雰囲気は以前とは変わっている。

オハギであることを思い出したオアギには、他人に流れる「アンコの血」を透かし見るように感じ取ることができた。マスターハギの「血」は、米粒ひとつの存在も許さないほどさらさらな——「ミナゴロシ」の血であった。目を見開くオアギを嘲るように、マスターハギはにやりと口の端を上げる。

「ようやく、ようやくここまで来た………!!」

そう噛み締めるように呟くマスターハギの顔はだんだんと歓喜の色に染まっていった。神の国ニホンにおいても、神に最も近づいた存在と言える彼は、英雄たるオアギよりも先にこの世界の仕組みに気がついていたのだ。
「俺が存在している時点で、世界のハンゴロシは免れない、そうだろう？」世界の調和は、不可解な法則でも、調停者たちによるものでもない。

「そうだ、そしてお前を倒し、お前との均衡を崩せば……」

マスターハギは言い放った。

「この、ハンゴロシとミナゴロシとの狭間にある世界を解放出来る。もう英雄なんて必要ないのだよ」

「ハンゴロシとミナゴロシの狭間……」

「そう。其れ即ち、人類繁栄の道よ」
「それなら俺は何のためにオハギを探し続けてきたというのだ」

「意味を求めるか、それもまた一興だ。だがここで死にゆく貴様には意味のないこと。歴史とは勝者の俺 TUEE 小説。せいぜいお前の墓前で小説投稿サイトから朗読される日を楽しみにしていな！」

マスターハギは背負った大振りで無骨な大剣に触れることすらなく、ただ構えただけでオアギから出血を起させた。

オアギ敗色濃厚！ 読者の諸君は皆諦めかけたことだろう。

だがそこに、彼の古い友人たる調停者たち、すなわち、「スーパースザク・エクストリーム鳳凰」、「偉大なる厄災スガワラ」、「アンコ使いのヤマト」が助けに駆けつけた。

「なあ、お前は、オアギだよ。誰が、何と言おうと」
調停者たちの歩みが、ゆっくりと重なって、そして。

思い出せ、自分が何者かを、もう一度——！

「……そうだ、それでこそお前だ、フランク・オアギ。ようやく倒しがいいのある相手になったな」

決断的な小豆色の光を瞳に宿した英雄を見て、マスターハギは嬉しそうに言った。

瞬間、空が割れた。マスターハギとオアギが激突したのだ。ハギの無骨な大剣を迎え撃つは、黄金に煌めく光であった。

「やはりお前もついていたか、キナコを！ しかし我が蒼キナコには届かん！」

蒼キナコ……かつてオアギの戦いを助けた伝説のアイテム、キナコが賞味期限を過ぎたときに現れるという、幻のアイテムだ。果たして、自分が持つキナコが、そのような幻の代物に届くだろうか。

——いや、鳳凰、スガワラ、ヤマトの力を受けた今なら、あの蒼キナコを撃破することも可能だろう。

「鳳凰、スガワラ、ヤマトの力を受けた今なら……！ あの蒼キナコを……！！ はあ——っ！！」

スーパースザク・エクストリーム鳳凰、偉大なる厄災スガワラ、アンコ使いのヤマトの生命を代償に、オアギは巨大なエネルギー波を照射した。

「な、なに！？ スーパースザク・エクストリーム鳳凰、偉大なる厄災スガワラ、アンコ使いのヤマトの生命を代償に、巨大なエネルギー波を照射したと！？」

これにはハギも動揺を禁じ得なかった。もはや自らでは手の届かない相手。ハギはそう悟ったのであった。

「蒼キナコを手に入れたときは今だ、とも思ったものが……まさかフランク、お前が三人もの助っ人を呼び寄せ、蒼キナコのためにその手でその全員の命を消し飛ばしてしまうとはな。」

お前に流れているのは「ハンゴロシ」の血だと思っていたが、これではまるで、まるでミナゴロシではないか！

老人は笑い出した。

(以降、複数人でそれぞれの幕引きを書き、
ここから結末まで三つに分岐)

① (浅雪ささめ)

「ミナゴロシの血だと？ 笑わせる」

強力なエネルギー波によって左半身のほとんどを失ったマスターハギに嘲笑を向ける。

「何を言っておる。現におまえを助けに来た三人は消え去ったではないか」

「毫碌したかマスターハギ」

がれきの中から現れたのはスーパーズザク・エクストリーム鳳凰、偉大なる厄災スガワラ、アンコ使いのヤマトの三人。わずかな傷を負っているものの、全員無事だった。

「ばかな、どうして死んでおらんのだ」

「さあな。すぐに死んでいくやつに教えるほどのものでもねえよ」

最後の一振りをマスターハギに容赦なく向けるオアギ。マスターハギは受け止めるすべもなく消えていく。

崩れゆくマスターハギの目に映ったのは調停者の一人、クリサンセマムだった。

……なるほど。やつの仕業だったか。

「悪いね。毎度いいところもらっちゃって」

『TheANKO』を撮取したことでクリサンセマムはみんなを助けることができたのだ。

「よくやったなオアギ」

「ああ。ありがとうクリサ」

これではらくは凄惨ながらも平和なキョートに戻るだろう。またそれぞれ調停者たちともしばらくお別れ。

だが、マスターハギ一人を倒したとてまだ「ミナゴロシ」の勢力は潜んでいる。

俺たちの戦いはこれからだ！

② (イチ)

老人は笑いだした……老人は笑いだした……

駄目だ。どうしてもその続きが思いつかない。

フランシスは机に向かって丸まった背中を延ばし、目の透かし窓からロンドンの低く垂れ込めた灰の空を睥む。残念ながらそれっぽっちでは気分転換とはならず、凝り固まった彼の頭の中では、いつまでもひなびた老人が高笑いをしていた。

彼は諦めの挫折感と共におよそ三時間ぶりに立ち上がり、自室を出て階下へ降りていった。

「あら、今頃降りてきたってあなたのお昼は用意してあげないわよ」

午後二時半のダイニングは、昼の仕事を終えて次のシフトまでの休憩を楽しんでいるようだ。耳ざとく彼の足音を聞きつけた母親が、言外に非難の色を滲ませながら彼に声をかけた。

「もしあれだったら、冷蔵庫になんかあるかも。ちよつと見てごらん」と、突き放したようでやっぱり世話を焼いてくるのは、母親のサガというやつか。空腹感は無かったが、彼女の厚意をあまり無碍にすると後で面倒だ。フランシスは素直に冷蔵庫へ向かった。

取っ手を引くと、途端に冷気が顔を打つ。フリーン、

センス、ウチミズ。

生鮮食品なんか何も無く、大量の調味料と総菜の残り、ある容器を覗くと中は春巻きだ。スシ、ベントー、イチラン。

ごった返した食品の中、あるプラスチックパックに視線が吸い寄せられる。中身には黒くて重そうなものが二つ。オニギリ、ゴマ……

「ママ、これ何？」

「さあ。甘いんですって」

「ふーん」

冷蔵庫の前に立ったまま一口かじってみると、それはとても甘くて美味しかった。何かは分からないが、良いものだとフランシスは思った。

③ (Moto)

老人の発言に、オアギはハツとして自分に流れるアンコの血を感じ取る。それは確かに、マスターハギのようならさらさらした血へと変化を遂げようとしていた。

「はっはっは、ようやく気付いたかフランク・オアギ。おぬしは先の大戦でどうして納豆が供給されたのか不思議に思わなかったのか？ 納豆にはアンコの血をさらさらにする成分が含まれている。僕の計画はあの頃から始まっていたのだ！」

オアギは黙り込む。世界の安定はオアギとマスターハギの、アンコの血のバランスに懸かっているのだ。このままでは、世界は半殺しではなく、完全な皆殺し状態になってしまう。

「オッハッギよ。ハンゴロシとミナゴロシという別の存在があったから世界は不安定だったのだ。ともにミナゴロシになってしまえば、それで世界は安定する。素晴らしいとは思わんかね？」

オアギはゆっくりと頷く。

「たしかに、アンコの血を持つ者がすべてミナゴロシになれば、世界は皆殺しとなって安定するだろう。変化しようがなくなる。だが、アンコの血を持っているのは俺たち2人だけではなかったはずだ。マスターハギ、お前はボタモチの存在を忘れてしまったのか？」

しかし老人は微笑んだ。

「もうすぐここに来るはずだ」

その時、英雄は自らの血が急速に熱を帯び始めるのを感じた。

「なんだ、これは？」

何かが遠くから近づいてくる。派手なパレードソング。今は珍しい電飾の煌めき。カラフルな衣装。

「旅芸人、亀末君餓鬼頭終亭①懸想担常盤。参上よ！」

オアギはすぐに、旅芸人の、その中に流れるアンコの血を感じ取った。

「まさかお前が、ボタモチなのか？」

「そう、世界中の希望をのせて、ここに推参したわ」

するとマスターハギは動揺した様子を見せる。

「なっなぜだ？ ボタモチよ。おぬしの血はすっかりさらさらになっていたはず。どうして、どうしてそんなにもハンゴロシに……いや、もっとドロドロになっているのだ？」

ボタモチはにこやかに笑った。

「それじゃあ、おやすみなさい。世界の幸せのために」

オアギと老人はその血がみるみる高温になり、凝固し始めたのを感じ——そして意識を失った。